

生き方を問う 領域から現場に踏み出す

高橋卓志さんが

信濃毎日新聞元旦の社説にとりあげられました。

一時帰国中の高橋卓志さん（70）に会いに京都を訪ねた。

松本市浅間温泉の神宮寺住職として、山門を広く開き、檀家（だんか）や縁ある人たちとの対話を重ね、法要や葬儀のあり方を変革してきた。

外にあっては国内外の生老病死の現場に立ち、異分野の専門家らと、苦しみの渦中にある人々の尊厳を守るケアを実践した。

そんな高橋さんが昨年5月、住職を“退職”した。寺の実務を谷川光昭副住職に譲り、運営の中心にあったNPOを次世代に引き継いでタイに渡った。その理由を直接、聞いたかった。

<苦に寄り添う思い>

道場での禅修行を終え、高橋さんが神宮寺に帰ったのは1975年。当時の住職は父親の勇音さんで、世襲だった。

子どものころから「坊さんになりたくない」と思い詰めていたという。帰山後も僧侶の仕事に身が入らず、定型通りに葬儀や法要をこなす日々を送った。

78年の慰霊行が転機となる。1万人以上の日本兵が戦死した南太平洋ビアク島の洞窟で、高橋さんは読経を始めた。泥水に身を屈した遺族の号泣が響き、高橋さんは経を読めなくなった。

いままで誰のために経を読んできたのか。坊さんは何をなすべきなのか。人々の「苦」に正面から向き合い始めた瞬間だった。

以来、近しい人を亡くした悲しみを支える「グリーンワーク」や終末期ケアに携わる。チェルノブイリでの医療支援、タイ北部でのHIV感染者の就業支援など、高橋さんは足しげく苦の現場に通うようになる。

県内では法制化されたNPOをもち立てる「長野県NPOセンター」の代表に就き、介護保険や成年後見制度に対応する「ライフデザインセンター」も創設した。

寺にあっては、作家の永六輔さんを校長に、僧侶の無着成恭さんを教頭に迎え「尋常浅間学校」を開校する。国内外の文化人が講師の「いのち」を考える授業は、10年間で100回を数えた。

廃業した温泉旅館で地域に介護サービスを提供する「ケアタウン浅間温泉」も展開した。いずれの活動も、苦に寄り添う「共苦」の思いに基づいている。

立脚点である寺を離れた理由を高橋さんは「大事なのは自分の仕事ではなく寺を残すこと。神宮寺もまた、時代に合わせて変わる必要がある」と言葉少なに語った。「固定観念に縛られている日本仏教界を離れ、タイで釈尊の仏教に近づきたい」とも。

<異分野との協働で>

いのちを巡る問題は深刻さを増している。

孤独死、過労死、自殺、虐待、貧困…。政府が「いざなぎ景気超え」を吹聴しても、格差は広がり家族形態は様変わりし、雇用も安定しない。困窮と展望を見いだせない落胆が根を張っている。

欧米では難民や移民を排斥する「自国第一」の声が高まる。紛争やテロも絶えない。強権的指導者が台頭し、民主政治を求める声がか細くなっている。

「閉塞感に風穴をあけようとする人たちは少なくない。仕事の尊厳を守り、本来すべき仕事をしたくても方法論が分からない。分かっても、大きな力に支配されて自己決定ができずにいる」。高橋さんはそう現代を見る。

「僕は、僕というスクリーンに私たちの生きる時代を投影してきた。必要なら行動しよう」と。実現できたのは、諏訪中央病院名誉院長の鎌田実さんや故永六輔さんら、さまざまな分野の人たちとの現場での協働があったからだ。

高橋さんの人脈や行動力を標準化することはできなくても、「高橋さんだからできた」で片付けたくはない。「個別化された、例えば仏教なら仏教界の中だけに居座っては、何も見えなくなるだろう」。高橋さんの言葉が警句となって響いてくる。

<自分の立ち位置は>

街中の人々が携帯の画面をのぞき込んでいる。好みの情報を幾ら集めてみても、人間関係の多様性や現場感覚をつかむ代替手段にはならないだろう。

高橋さんのこれからについて尋ねると、こう答えた。「まともにもの事を吸収し、考え、行動できるのはあと5年。この間でやり切るとなると…」。いま念頭にあるのはHIVに感染したタイ北部の女性たちの後半生のケアの仕組みを整えること。自分を含む団塊世代の病老死に立ち会い、最期を見送ること、という。

そのためには組織をつくるエネルギーと資金が要る。「また同じことをするのはキツイよね」と笑いながらも、高橋さんは「自分の立ち位置を知り、生き方を問い直す核」と言う現場を、変わることなく見据えていた。

不安な時代だからこそ、高橋さんたちが刻んできたわだちを途絶えさせてはならないと思う。それぞれが自分の領域を越え、共に生きる人たちのいる身近な現場へ踏み込んでみたい。

(1月1日)